武田泰淳全集

第九巻

筑摩書房

武田泰淳全集　第九巻
昭和四十七年六月二十五日　第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
電話　東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
郵便番号　一〇一―九一

印刷　株式会社三松堂
製本　和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72409 (出版社) 4604

第九巻　目　次

十三妹……3
秋風秋雨人を愁殺す……176
王者と異族の美姫たち……297
揚州の老虎……330
解　説……竹内　好……343
解　題……355

小

説

9

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

十三妹

首の話

人が人を殺すとは、まことにむごたらしい話である。まして、人の生首を切りとるなどとは、どういう神経の持主であろうかと、おどろかずにはいられない。

だが、日本でも中国でも、いや、地球上いたるところで、切りとられた生首の現物にお目にかかって、おびやかされる時代があったことは、たしかである。そして、そのころは江戸から京都へ、南京から北京へ旅するあいだはむろんのこと、あつい壁にかこまれた家の奥にひそんでいても、深夜、自分の首すじにヒヤリと冷たい剣の刃のさわるのを感じて、おそれおののいたものらしい。

まっとうな裁判にかけられ、罪を問われて打ち首になるならともかく、ある日、突如として何者かに、いきなり首を胴体から切りはなされるという危険があった。

まさか首をかき切るだけではなかったろうが、つまり血なまぐさい仕事を専門にする、物騒な男たち（女もまれにはまじっていた）が、かなり多数、どこかそこらへんに出没していたらしい。「らしい」と言うのは、彼らはなにしろ夜行衣（黒装束）に身をかため、百宝嚢（ひゃっぽうのう）におさめた多種多様の小道具を用いて、常人にはとうてい不可能な飛躍や疾走をやってのけ、その上、めったなことでは正体をあらわさなかったからである。

乞食、薬売り、卜師、棒つかい、拳術家、僧侶、漁夫、木こり、時には将軍や大官にまで変装して、野こえ山こえ、水をくぐりまでして、あの広大なる中国大陸を、すみからすみまでうろつきまわっていて、成功すれば立身出世して政府の中枢部にまでもぐりこみ、失敗すれば野たれ死して、あとを残さなかった。「刺客」、「遊侠」、「義士」、「豪傑」、「英雄」、「勇士」、「侠客」など、いろいろ好みの名で呼ば

れているが、中国では「忍者」という単語だけは、ほとんどつかわれていない。

強キヲクジイテ弱キヲタスケル。いわゆる「おとこだて」「おとこぎのある人」は、すべて侠士、侠者、任侠など「侠」の字をつけられている。侠気がある、侠骨があると称されれば、まず善玉の部類にぞくする。

ただし「侠」ともなれば、おとなしい文化人ではない。読書人とか儒者とか、君子とか、士大夫とかいう仲間には入れない、一種の「危険人物」であった。

侠のうちでも大侠の元祖は、秦の始皇帝をねらった刺客、荆軻（けいか）という男であろう。

始皇帝は天下を統一しようとする権威ならびなき大皇帝であるから、面会するのがまずむずかしい。ヒトラーやスターリンだって、いつ刺客におそわれるか、たえず警戒おこたりなかったであろうから、特別の工夫をこらさないと接近できなかったであろう。

たまたま、秦国から亡命して、燕の国にかくまわれている将軍がいた。この将軍は、始皇帝をたおすためなら命もおしくない男なので、荆軻にたのまれると「さようか。では私の首をさしあげよう」と承知してくれた。将軍が自分の手で切りおとして提供した生首を、土産物として荆軻は秦にのりこんだのである。イギリスへ亡命中のドゴール将軍の血まみれの生首をひっさげて参上したら、おそらく当時のヒトラーも信用したにちがいあるまい。

人の首を切る話から、つい「これがほしい？　では御自由に使いなさるがよい」とあっさり一つきりしかない品物を切断してくれた将軍の話にそれたけれども、私のこれから語ろうとするのは、もう少し気らくな、三百年ほど昔の中国忍者伝にすぎない。

「おねえさま。あのときは、全部でいくつでしたっけ？」

「さあ、いくつだったかしら」

「殺しなさったのは、たしか十三人とおぼえていますけど」

「そうだったかしら」

「いやですわ。御自身で手をかけなさったのに、人数をおぼえていらっしゃらないなんて」

「でも、おぼえていてもつまらないもの。それに、もう過ぎ去った昔のことよ」

「昔のことって、まだ一年にもなりませんわ。私たちは、こわい、恐ろしいで無我夢中でしたから、おねえさまに殺された男の数も、よくおぼえてはいないけれど。でも、たしか、おねえさまが切りおとした首は、三つ以上……。たしか、そうだったようですわ」

「……月の光が、あかるかった」

「青い月の光にてらされて、たしか、あのお寺の建物の内や外に、胴からはなれてころがっていた男の首は、二つか三つ。もっと、あったかもしれないわ」
「ころがっていたのは、首だけじゃない……」
「そうよ。胴も足も腕もよ。重なりあったりして。すべてがおわったとき、とてもなまぐさい風が、あたり一面に吹き起ったわ」
「あの晩の風が、そんなになまぐさかった？」
「そうですとも。あんな血まみれの場所を吹きわたる風が、どうしてなまぐさくないはずがあるものですか。私たちの身体までが、血や死体のにおいがしていたのに」
「あなたは、そう感じたのね」
「ええ、そうですわ。おねえさまは、ちがうの？」
「……あの夜の風だけが、特になまぐさいとは、私は感じなかったわ」
　この二人の女性は、安家の奥の間に、おとなしく腰をおろしていて、あたりには女部屋らしき香りがたちこめ、中庭の花々もみどりも、池も石だたみも、すべてはめぐまれた貴族の平安を示してしずかだった。
　会話にふくまれているような、殺気など、どこにもただよってはいない。
　そのころの北京には、南のかた杭州、蘇州をはじめ、東、西、北、およそ美女の名産地から、えりすぐった美女があつめられてはいたが、まずこの二人ほどの女は、容易にお目にかかることができまい。
「おねえさま」と呼ばれている方が、第二夫人。つまり第一夫人の方が、へりくだっている点が、ほかの家庭とは異っている。
　二人とも、やっと二十になったばかりで、美貌のほかに、なみなみならぬしっかり者ぞろいであったから、安家の若主人の幸運をうらやまぬものはない。
　豪農の一人娘である第一夫人の方は、健全な主婦として、あぶなげがない。家計のきりもり、使用人のとりさばき、料理、裁縫、父母への孝養、万事に手ぬかりはない。
　問題は、第二夫人の方であることは、以上の会話の断片からして察せられるであろう。なにしろ、数は不明だが、かつて男の首をいくつか切り落した体験があるらしい。
　第二夫人はけっして、無表情にこわばってはいない。女らしい、やさしい微妙な変化も、その威厳のある顔にあらわれぬわけではない。
　ただし、彼女が興奮したり取りみだしたりしたのを、家族の者は一回も見たことがなかった。武芸の自慢ばなしなどするタチではなし、今では、得意の弾弓（いしゆみ）や剣を手にとることもない。

首の話など、女どうしでつぶやいていながら、うす気味わるく感じられるだけで、ここは御大家の奥の奥、だれ一人きき耳を立てる者のない深窓であるから、彼女の本性をうたぐられる心配はなかった。

女剣客、女忍者、いや、女賊だったという、うわさもある。しかし現在のところ、夫は彼女を愛し、彼女も夫を愛しているのだから、それでさしつかえはないわけである。

第一夫人「そうそう。おねえさまは、こんな話は、おきらいでしたわね」

第二夫人「いいえ。きらいと言うより、つまらないことは、早く忘れた方がよろしいからよ」

第一「でも、おねえさまは、あのおはたらきで旦那様ばかりでなく、私どもの命まで救って下さったんだから、つまらないことではありませんわ」

第二「あなた方を救いたいから、救いました。そのために多くの男たちを殺しました。それはその通りだけれど、あれは実にちっぽけな、つまらない仕事なのよ」

第一「旦那さまは、今日も御勉強ね。ああ読書ばかりしていて、身体にさわりがなければよろしいけれど。男の方は、いやでも国家試験にパスしなければならないから、大へんですわね。でも、みんな、おねえさまのおかげなのよ。あのとき一命を失っていらっしゃれば、試験勉強も何も、おできにならないはずですものね。それに私たちとの結婚も。オホホ」

負けん気ではあるが、楽天的な性分の第一夫人は、袖口を可愛い口もとにあてがって、かすかに笑った。

「シッ！」と相手をたしなめると、第二夫人は卓上の灯火を吹き消した。くらやみの中で「寝台の下に入っていなさい。動いてはいけません」という、冷静な彼女の言葉が、何の動揺もなく、金属板をたたいた音のように、低くきこえた。

不意の出来事で、いささかあわててはいるが、寝台の下にはいこんだ第一夫人は、さしておそれてはいなかった。「おねえさま」の才能に、絶対の信頼をおいていたからである。

「おねえさま」は、室外にすべり出たはずだが、息をひそめている彼女に、その足音はききとれなかった。

室外の、ひろびろとした闇の中で、空気を切って飛ぶ、石か剣か矢か、なにかしら攻撃用の物体の突進するピュッという、するどい音がきこえた。つづいて、ギャアアオオッという、大げさで、みじめな男の悲鳴がきこえた。そして中庭と外庭をくぎる高い塀のあたりから落下する人体の、地面に衝突する音が、にぶく、ぶざまにきこえた。

姿を消した第二夫人が外で何をやっているのか、第一夫

人にはわからない。なかなか室内にもどってこないからには、まだまだ彼女はひそかな行動をつづけているにちがいない。

かつては勇名をとどろかせた、十三妹（シイサンメイ）。実の名は何玉鳳。彼女は、安家の公子（若だんな）とは新婚そうそうで、結婚の宴があってから、まだ二週間である。

結婚は、女性にとって一つの重大な出発点である。夫を楽しませ、自分でもまことに楽しい甘い蜜月、家を守り子を育てる未来に向って胸ときめかせる、はなやかな季節であるはずだ。

セックス方面で、十三妹がどのような女丈夫であったかは、伝えられていない。しかし、いかなる女剣客でも、女性であるからには、その肉体は女体でなければならない。生理作用も、男体とはちがっている。

ヨーロッパ伝説に名を残したアマゾンの女戦士たちは、弓を射るのに便利なように、乳房の一つをえぐりとった。女体とは、つまり戦闘に不便な肉体なのである。テレビなどで拝見する黒衣の女忍者の活躍も、なかなかにめざましいが、やはり腰つき、腕のふりまわし方、足さばきなど、動作にムリがあるように見うけられる。

「男マサリノ政岡デサエ」という、あの卑猥な俗謡は、下品で感心できないにしても、あの歌詞には一種の真理がふくまれている。たとえ男を圧倒できる強き女性でも、いかんせん、肉体的にはひけめがあること。この定理からは、十三妹といえども、逃げ出すことができなかったのではないか。そして、そのひけめがあればこそ、女体は男性にとって、可愛らしくてたまらぬものなのではないか。「ギャアアオオッ」と叫んで、ころがりおちた盗賊は、まさか自分の眉間に煉瓦を命中させた相手が、女であろうなどとは、想像もできなかった。

おもしろいことに、この未熟な盗賊は、だれか攻めかかってくる家人がいたら、ねらい打ちしようと、めくりとっておいた一枚の瓦を、にぎりしめたまま墜落したのであった。

目がくらんだ上に、腰骨をしたたか打った彼は、急に起き上れない。起き上れはしないが、そこは盗賊のことであるから、すぐさま攻撃者が自分をしばりにくるものと覚悟していた。寝わざの形で、身がまえている。

だが、彼はそのまま棄てておかれた。

第二夫人は、別の二人の男を、とりおさえなければならなかったからだ。

「おであいなされい。曲者ですぞ」と、援助を求めたりするのは、素人のやることである。専門家は同時に、三つぐらいの早業を無言でやってのけねばならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

襲来した男は、三名。めいめいが、どこに突っ立ち、どこにうずくまり、どこに目標を定めているか。それぞれの得意の武器は、何か。仲間どうし、どこまで巧妙な計画をしめしあわせてきたか。

それくらいの判断は、一呼吸のあいだにできなければならない。

第二の盗賊は、女部屋の裏手のくぐり戸の向う側で、熱心に仕事をしていた。

厚い板でできたくぐり戸には、太いかんぬきが掛けてある。技巧派らしい第二の男は、用意してきた縄を向う側から投げ入れ、その先のツメを器用にひっかけて、かんぬきをはずしにかかっていた。

音をさせぬようにかんぬきを引きぬくには、まわりくどい手つづきが要る。男はまず、くぐり戸の西側の窓格子から手をさし入れ、かんぬきと、その棒をはめた鉄の環をさぐり、位置をたしかめる。それから手をひっこめて、縄をすべりこませ、そのツメで横棒をひっかけ、縄の一端を窓格子に結びつけておいてから、環の中の棒を横にずらして行く。かんぬきは、やがて環からはずれることになるが、縄で結んであるから、落ちて音をたてることはない。

次に、くぐり戸の東側で、おなじような、めんどうくさい仕事をやる。両側のかんぬきを二本とも環からはずしておいてから、窓格子の縄をほどいて、しずかに地上におろそうという寸法だ。

第一の男が、十三妹の投げた煉瓦で打ちおとされたとき、この金庫破りの如く手先の器用な第二の男は、西側のかんぬきを引き抜きおわって、東側の格子窓から、おそるおそる手をつっこんでいたのである。

窓の障子紙も、あらかじめ水でしめらせておいてから（バリバリと破けては、ねむりをさますから）、注意に注意を重ねたのではあったが、男の手首は、内側からひっつかまえられてしまった。

彼があわてて引きもどすには、にぎりしめた若夫人の手は力が強すぎた。のみならず、彼の手は奇妙なぐあいにねじりあげられたので、腕の関節はたちまちはずれた。淑女の脚先で蹴りつけられ、手の指の骨まで、三本も折れてしまったのである。

おまけに、死んだ蛇のようにたれ下った、だらしない彼の手は、縄で柱にくくりつけられた。したがって、戸の外側の彼の身体も（彼の片手につながっているため）、ハリツケにでもなったように、板に密着させられてしまったのである。

しかも、彼にとって不面目きわまることには、十三妹は、彼が西側のかんぬき作業に使用した縄を、彼の片手をくく

りつけるのに逆用したのだった。

それでも、第一の男より少しは訓練をつんだ第二の男は、うめき声一つ立てなかった。

それはそれで、ほめてやってもよいけれども、口笛を吹いて仲間に危険を知らせたのは感心できなかった。口笛を吹きならす盗賊の、臭気ふんぷんたる大口の向っている方角で、女流の先輩は、第三の男の潜伏場所を、さとってしまったからである。

盗賊のことを「梁上の君子」と呼ぶ。ハリの上、頭上高い場所にかくれられるようでないと、盗人にはなれない。第三の賊は、安家では一ばん高い、大広間の屋根の上にひそんでいた。

雪もよいの冬の夜空は、さほど明るくはない。第三の賊は、くっきょう、色黒の大男。大刀をひっさげても恥ずかしくない、親分格の体軀である。寒風に吹きさらされる屋上から、彼は脚下の騒動を、ゆっくりと見下していた。「ゆっくり」とは言っても、十三妹の働きは、ほんの二十秒ほどの短いあいだではあったが。

かつての女侠、十三妹がこの安家の第二夫人におさまっていることを、三人の盗賊は知らなかった。知っていたのは、盛大な結婚式、かつぎこまれた嫁入道具、ことに現金、いや、ずしりと重い銀の塊のおびただしさだけであった。

現在の紙幣や硬貨のような、持ちはこびにつごうのよい通貨ではなくて、現ナマの銀（ヒヅメの形に似ているから馬蹄銀の名がある）が尊重された時代だから、かつぎ人夫の肩の重さで、大体の予測はついたのであろう。

「ありゃりゃりゃ。どうも様子がおかしいぞ」

第二夫人のあでやかな武者ぶりを、夜目にしかと見とどけたわけではない。何かしら、ただごとならぬ脚下の気配で、頭目は両足がすくむ思いがした。

自分たちに手むかえるだけの、腕におぼえのある男どもが、安家にいるはずのないことは、調査ずみであった。おいぼれ夫婦は、儒教の「仁」の教えなど守って、汚職など一銭もできないカタブツぞろいで、悪知恵のはたらく官吏仲間からは、そのためけむったがられ、失脚しかかったこともある。

官吏と言っても、文武二つの系統にわかれていて、ここは「文」の家柄だから、乗馬や弓術ぐらいは心得ていても、ほんのお体裁の、おなぐさみで、たかが知れている。「礼・楽・射・御・書・数」と、孔子様とやらがお教えになったそうだから、たぶん礼儀、音楽、学芸、書道、数学なんぞにおたしなみがおありだろうが、こちとらから言わせりゃあ、要するに、ちょっとした飾りモノで、いざという男の争いとなれば、なんのお役にもたちゃしめえ。大体

が、仁義道徳、学問文化をひとりじめにしたつもりで、御身御大切におさまっていらっしゃる、そんな奴らが、いけすかねえや。自分だけしこたま貯めこんでいやあがって、何が「身ヲオサメ、家ヲトトノエ、国ヲ治メ、天下ヲ平ラグ」だい。ここは、一丁おどかして、文化人の心胆を寒からしめてやろうじゃねえか。

盗みなら盗みに、熱中していれば、まだよかったのに、つまらぬ理屈や解釈をつけようとしたおかげで、色黒の大男の動作は多少にぶっていた。

とにかく彼は、白い蝶のようなものが、ひらひらと目の前にあらわれて、消えるのを見た。また、小鼠が瓦の波の上を、すばやく走り去るような、かそけき音をきいた。少しの殺気も感じさせない、やわらかで白い色と、小さな小さな音が、彼のまわりにおぼろげに発生したわけであるが、彼にはそれが「敵」の気配だとは察するすべもなかった。

飛鳥の如く屋上におどりあがったと、相手に気づかせるようでは、忍者として第二級である。飛鳥とも何とも形の定めがたいものが、ふわふわと宙に漂ったと感じとらせただけで、すでに目標に接近していなければならない。

第二夫人の考えは、大さわぎをひきおこさないで、つまり家族の眠りをさまさせぬうちに、始末することであった。白い羽のひらめきに見とれ、小動物の足音に耳すましているうちに、大男は目まいがして、耳はつんぼ同然になり、ぐるぐる回って、よろめきながら、屋根から足をすべらせたのである。

第二夫人がたったひとりで、三人の男をしばりあげてしまっても、まだ彼女の夫、彼女の夫の老父母、第一夫人の老父母、および召使たちのだれ一人として、この非常事態に気づいていなかった。

みんなスヤスヤと、泰平の夢をむさぼっていたのである。ベッドの下にもぐりこんだ、第一夫人は？

あれほど「おねえさま」に注意されたはずなのに、かんじんの彼女がもっとも安楽そうに、寝息をたてていたのである。

これは彼女が農村の生れで、神経が太いためではなかった。泥棒が用いた、麻酔香の煙で、ねむらされたのだった。盗賊の中でも技巧派は、よくこの線香をくゆらせ、障子から刺しこみ、あらかじめ室内の者を無力にしておく。

十三妹は、男どもの侵入を、この麻酔香のにおいで、すでにかぎわけることができたのだから、せっかくの相手の計略は、マイナスになったわけだ。

書斎の安公子は、もちろん机に向って、古典の文章を暗記している最中だったから、両眼はパッチリひらいていた。しかし、彼の両眼は、予定された国家試験のためにひらい

ていたのであって、予想されざる敵に向っては、つぶっているのも同然だった。

安家の若主人は、はやいところ御勉強を中止して、新妻の寝室へ行きたくてたまらなかった。「新婚の間」は特別はなやかにしつらえられていて、青春の男性をうっとりさせるムードに満ちていて、「たのしいわよ。早く、おいでになってよ」と、招いているようなものであった。

ただし、その日の昼食のさい、老父は「しっかりせにゃ、いかんぞな。嫁さんにうつつをぬかしておったら、とてもパスはできんからの」と、厳格にたしなめたばかりだし、おとなしい若主人は、おちつかぬ腰をなんとかして冷たい椅子に座らせようと、モゾモゾしてばかりいた。

「様子を見に行くだけなら、いいだろう。ただ、ほんのしばらく話をして、すぐさま書斎へもどればいいんだから。いくら父上の命令でも、そうそう親の言いつけで、彼女をほうりっぱなしにはできないじゃないか。それに、わざわざ、こちらから頼んで、やっと来てもらった彼女だし、第一、ぼくの命の恩人、つまりは安家の大恩人なんだから、そまつにはできやしない。それに……」と、彼は考える。

「それに、なるほどわが大清国にあっては、男は女の上に立つ、女は男の下につくと決っているようだし、どこの御家庭でもそうなって無事にすんではいるらしいが、ぼくと彼女の関係は、はたしてそうでしょうか。え？　どうなんですか、正直のところ。彼女、十三妹とはタダモノではありませんよ。私が彼女を愛する。彼女が私を愛してくれる。仲むつまじく、子孫繁栄。ところが、この『愛する』というのが、ぼくと彼女の場合、そううまく行くでしょうか。うまく行かなくては、困ります。困りますから、たぶん、うまく行くことになるでしょう。だけど、彼女はとびぬけ強い女性なんです。全く、すばらしく強くて強くて……」

と、安公子はいつのまにか、廊下を歩き出していた。

かしこい安公子は、自分が豪傑でも英雄でもないことを、よく心得ている。ただし、高位高官に登れるだけの才能はあるのだから、いったん権力の座についたら、天下の豪傑と交りを結び、大いに人材を結集しなければなるまい。

さもなければ、せっかく手に入れた地位を守ることができない。

「もしも四方の豪傑の士にめぐりあったら、かならずへり下って、ぜひとも逃がさないように、自分のまわりにひきつけておいて、イザという際には彼らを巧みに活用する。これが、政治家たる者、ねてもさめても忘れてはならぬ第一条だ。ただし」

書斎から「新婚の間」までの廊下は、えらく風通しがよく、長く、折れ曲って、寒かった。

「ただし、第二夫人が豪傑だとすると、これは一体、どういうことになるのかな。彼女は可愛い。ふるいつきたくなるほど、可愛い美女だ。だから、可愛がりたくなる。それは、イヤでもそうなりますよ。だけど、彼女はまさしく豪傑じゃないですか。豪傑でもない男が、豪傑である女を可愛がる？　そこんところが、どうも妙な具合になるんじゃないかな」

できるだけ男の威厳をたもち、できるだけおちつきはらって、彼は新妻の部屋に入らねばならない。

「エヘン」。この咳ばらいは、まずかったかな。なにしろ、何でも見ぬいてしまう、剣客の眼光をもつ女性だからな。

「お風邪をめしますよ。早くお部屋に入らないと」

彼の肩には、いつのまにか、羽織とも首巻きともつかぬ防寒具が、やさしく掛けられた。

「そうですわ。私の部屋は冷えておりますから、張金鳳さんの部屋へいらっしゃった方がよろしいわ」

と言われても、夫は、妻の体温と香気を感じとっただけで、姿を見ることができなかった。

当時の貴族の妻たちは、やたらに夫を自分の部屋に引きずり入れなかった。おたがいに譲りあって、他の寝室をすすめるのが礼儀である。

張金鳳とは、第一夫人の名。金鳳とも、まだ結婚して一年そこそこなのであるから、安公子としては、その寝室も魅力があった。

「いや、それもよかろうが。しかし、あなたとお話がしたくなって来たんだから……」

「あのひと、こわい目にあったあとですから、なぐさめに行っておあげなさいよ」

「……何か、あったのか」

「御両親には、朝までだまっていらっしゃい。あなた、今すぐ御覧になりますか」

「な、なんですか一体」

「受験勉強の、参考になることではありませんし……。さあ、どちらがよろしいか。家内とりしまりのためには、一応は見ていただいた方が……」

十三妹は、声を沈ませて迷っていた。

独断で跡始末をしてしまって、報告ぬきにすれば、夫をないがしろにする結果になる。心のやさしい夫が、いきなり実物見学をして、ショックを受け、一晩でも読書をなまけるようでは、申しわけがない。

やがては、県知事や最高裁判所長官、警視総監、あるいは司法、文部、総理の大臣職に就かれる御方だ。むずかしい河川工事の監督や、国境の反乱軍の大がかりの討伐に、いつ派遣されるかも知れない。

その下準備としては「この世の中では、あらゆる奇怪なできごとが発生する可能性があるのであるから、あらかじめ、その覚悟をしておいた方が安全である」という、忍者の定理をも、よくのみこんでいただいた方が、立身出世の助けになるであろう。

「二人は、まだ生きておりますが。まことに恥ずかしい次第ではございますが、一人だけは、つい手がすべりまして」

いろいろの予想をまとめあげた上で、第二夫人は、ひかえ目に、そう申し上げた。

雨は、雪にかわりはじめている。中庭にはますます、きびしい冬の風が吹きわたる。先に立つ新妻の手が、自分の手をかるくにぎって、案内してくれるまま、夫は中庭へおりる。

「しばらく、ここでお待ちになって。もう危いことはありませんから」

妻は夫をのこして、廊下への石段をあがって行く。ズルズル、ズルズルと何かが石だたみの上をはっている音が、気味わるくきこえるほか、中庭は、青みがかったまっくらやみである。妻のもち出した手燭のあかりで、あたりが赤っぽく照らされ、廊下の柱や手すりの影が、ゆっくりと移動する。

おびえていると推察されるのが、つらいので、安公子は近づいてくる手燭の光から、顔をそむけるようにした。

妻が手燭を地面に置いたので、夫の影は、中じきりの壁に大きくのし上った。

「おや、まだ若い男だったのね。私たちと同じぐらいの年ごろだわ」

庭の隅まで歩いてから、しゃがみこんだ妻が、両手でささげもった丸い物が、人の首だとは、まだ夫は気づかなかった。

それは、一番目の盗賊の首であった。彼は、十三妹が仲間の二人と格闘しているあいだに、痛みをこらえて起き上り、屋上からとび降りてきた彼女に、あまり切れ味のよくない安価な鈍刀をふるって、おそいかかった。

彼の方にも、十三妹の方にも、ハッキリ殺してやるという意志はなかった。彼女の愛用しているのは、長刀も短刀も日本製で、切れ味が中国農村の鍛冶屋のいいかげんなシロモノとは、くらべものにならない逸品であった。

長刀は、自室の壁にかけられていて、胸中にしていたのは短刀だけだったので、彼女の手さきも多少は狂ったのだ。

とにかく二、三回打ちあってから、彼女が一メートルも飛びすさったとき、男の首はもはや切断され、それでもよろめく胴体の上にしばしとどまっていてから、倒れ伏すと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook